特別展 打出焼

—藤川祐作コレクション—

ご あ い さ つ

当館の展示品の大部分は民俗資料としての民具であります。民具といえば衣食住、とくに食に関するものが日常的に最も身近な存在であるといえましょう。今回の特別展『打出焼』における展示品を見るかぎり、何となく飲食器が多いように感じられるのも、あながち私だけではなさそうです。

もっとも、打出焼と呼ばれるやきものにどのようなものが多く作られたのか、門外漢の私には知る由もありません。しかし、収集する場合に入手しやすかったのは、やはり使用頻度の高い飲食器類ではなかったかということは容易に想像できましょう。

今回の展示品は、ほとんど当館の藤川祐作研究員の個人収蔵にかかるものであります。展示に関しましては、当人による多年の研究成果の発露であることはいうまでもありませんが、とくに青木重雄、岩本昌三、森沢達夫の各先生方のご指導並びにご協力を得ましたことは何より有難く、厚くお礼申し上げます。

当館としては、久方ぶりの特別展でもありますので、はじめてこのような図録を作成いたしました。ご来館のみなさまには何卒ごゆっくりご鑑賞下さるようお願いいたします。

平成6年10月

神戸深江生活文化史料館

館長　杉浦昭典

凡　　例

1．この図録は、平成6年10月22日(土)から平成7年3月26日(日)まで、神戸深江生活文化史料館3階において開催される特別展「打出焼」に際して制作したものである。

2．この図録の写真番号は、展示目録の番号に一致する。ただし、展示の順序は必ずしも番号順とはなっていない。

3．展示品の名称を付けるにあたっては、青木重雄氏にお願いした。

4．展示品の内、No.1～No.59までは当館研究員藤川祐作所蔵、No.60～No.63は当館所蔵である。

5．図版写真は、当館研究員藤川祐作が撮影した。

6．この図録の編集は、当館主任研究員望月浩が担当した。

うちで焼について

青木　重雄

（美術評論家・『兵庫のやきもの』著者）

私がうちで焼（打出焼）のことを知ったのは昭和30年ごろだったと思う。そのころ私は神戸新聞の戦後第１号の美術記者で、やっと復興途上の美術界を取材に歩き回っていたが、親しくなった神戸の洋画家のだれかからその名を教えられたもので、実際に同窯へ取材に出掛けたのはその後しばらくしてからだったと思う。記憶が定かでなく、しかも今もって窯の様子などは全然覚えておらぬのだが、ただ数多くの大小のうちで焼の作品が棚や台の上に並べられていてとても明るかった陳列室の内部の情景だけは不思議に覚えているのである。大きな花瓶はじめ総じて黄白色のやきものが多かったことも同時に記憶に残っている。その時神戸から同行してくれたのはたしか二紀会の坂本益夫画伯だったような気がする。

うちで焼については、平安時代から焼かれたなどの伝説もささやかれているが、実際には元来俳人だった阪口庄蔵（号砂山）が明治42年に現在は芦屋市の阪神電鉄打出駅に近い春日町で焼き始めたものだが、なにぶん交通に便利な阪神間の真ん中頃という地の利の上に別荘地帯という良さもあって、戦前からも一般人の他に多くの知名人や文化人などの出入りがあり、その影響で一見京焼風で風味のある様々な日常陶器や茶陶が数多く焼かれた。中には名士や有名画家の絵付の作品もかなり生まれた。同窯を訪れた時、私は同家蔵の瓢形黄釉大花瓶の写真を撮らせてもらったが、この花瓶には大阪の日本画家の加藤雪谷の彫り銘「我寿是」の大文字が記されていた。他に大阪からは菅楯彦や矢野橋村画伯らも何回か来窯しており、また、兵庫県下各地や京都からも多くの洋画家や日本画家が顔を見せ、戦前、戦後を通じて他の窯には見られない一種の文化社交場的なふんいきを持った窯としてもよく知られていた。

作品も多種で、庄蔵、二代目淳、三代目孝を通じて、花器や各種茶陶・小鉢・皿・陶額などが多く、さらにオブジエ風な作品なども加えて特に戦前から戦後へかけて活躍、内地向けだけでなく、一時はアメリカなどへの輸出品も手がけた。生徒の数も増える一方だった。もともと周辺に良土があったので、それを利用して初代砂山が焼き出したわけだが、伊賀・信楽・京都などの土も取り寄せて混用した。窯は登り窯で1300度近い高温で焼き、生産量も多かったので、特に阪神間各地はじめ大阪、神戸などに今日もうちで焼の所有者が随所に見い出だされる。だが、昭和40年代ごろから付近が住宅として発展するにつれて次第に肝心の陶土が得られなくなり、やむなく二代目砂山の時ついに窯を閉じることになった。

こうして、『日本古陶銘款集（近畿篇）』（昭和15年宝雲舎刊）に「武庫郡精道村打出の産、明治末年齋藤某創業。現今阪口庄蔵製陶に従事す。製品茶器、花瓶、置物、菓子器等」と書かれた阪神間の名窯も打出ではついに姿を消したが、三代目砂山の孝は、現在京都に自窯を設けて仕事を続けながら、一方県下では芦屋（芦陶会）はじめ西宮・尼崎・宝塚・川西の4市に手広く窯を築き、専らアマチュア陶工たちの指導と養成に当たっている。ちなみに前記の齋藤某については、私のその後の調べによると、齋藤幾太（故人）のことで、同氏は久原房之助（故人、政友会総裁）の実兄で明治中期に現在の神戸市中央区楠町に齋藤御殿と呼ばれた別荘を建てたが、その邸内に趣味窯を作り、各地の陶工を呼んで庭焼に熱中した。初代阪口砂山はその一人で、後日ここでの勉強を基礎にしてうちで焼を開窯したのだった。

（1994.7.27記）

私と打出焼

藤川　祐作

本館は地元深山家や深江漁業協同組合などから数々の資料の寄贈を受け、『神戸深江生活文化史料館』として公開し、広く地元のみなさんをはじめ、近年小学生の見学が増加、定着化しつつあることは当館にとって大変喜ばしいことである。

さて前述した深山家は、ここ深江で長年医業を営んできた家で、寄贈された多くの資料の中に、打出焼が5点含まれている。打出焼が深江周辺でも広く使われていたわけで、私がここ10年近く収集してきた打出焼を見ていただくために、特別展を企画した。

深山家から寄贈を受けた打出焼については、すでに本館『生活文化史』第6号（1984）の中で、望月浩主任研究員が「展示品との対話(3)　打出焼について」と題してふれている。

旧打出村は、古くから良質の土を産出しており、明治の中頃斉藤幾太氏がこの良質の土に着目し、現・楠町に窯を開いた。その後、阪口砂山（庄蔵）氏があとをひきつぎ、明治43年（1910）に打出村古敷23（現在の春日町）に打出焼として開窯。大正3年（1914）には、資本金1万円で合資会社打出焼陶器工場を設立。昭和12年（1937）初代砂山氏の死去に伴い、淳氏が「2代目砂山」を継いだ。

2代目は、打出焼の普及の一つの手段として、「陶芸趣味の会」を催された。

打出焼は京焼の流れを汲むことから、京都から粘土を練りに職人が来ていたということも聞いた。ただ打出の良質の土にも限度があり、信楽・京都など各地の土を使うようになった。

両家児玉隆男氏（故人）の大正6年のスケッチには、「壁土を打つ人」と題して土を砕いている風景が描かれ、西宮や新在家（神戸市）方面へ運ばれていたとある。また、芦屋市三条町付近の民家の屋根瓦にも打出焼が見られる。

2代目砂山は、昭和40年前後から体調を崩し、作陶の中止を余儀なくされた。

3代目のご子息孝氏は、初代・2代目とは少しばかり違った陶芸の道にすすまれ、阪神間の陶芸グループの指導や、芦屋・西宮・尼崎各市の美術協会員や芸術文化協会運営委員を務められるなど、幅広く活躍をされている。

昭和53年に2代目が亡くなられ、打出焼の窯のあった一帯も区画整理などで当時をしのぶ景観がなくなりつつあるのが現状である。

さて私と打出焼との出会いは、過去に数度あるように思われる。

順序は前後するが、2度目の出会いは、昭和41年（1966）である。私が籍を置く歴史研究団体芦

ノ芽グループの会員数人と、兄と兄の友人を伴って窯を訪れ、２代目砂山氏の指導のもと、各人が粘土を捏ね、小鉢や抹茶器・箸置き・ペンダント・勾玉など思い思いの作品を創り、そして砂山氏を囲んでの記念撮影をした楽しい１日であったように記憶している。

それからかれこれ20年あまり、打出焼についてはまったく忘れていたといっても決して過言ではない。

３度目の出会いは、昭和62年（1987）６月、よく出入りしている芦屋市内の古道具屋さんの主人から「これ打出焼です。いかがですか」と声を掛けられ、手にとって見た時であった。その時の作品がNo.１の菓子器である。その時の感想は打出焼を手にした感激よりも、前述したように20年あまり全く打出焼について関心を持たなかった自分自身へのふがいなさの方が、印象として強かったように思う。手にした菓子器の価格はそこそこの値であった事から買い求めた。

さっそく、打出焼について私なりにいろいろと調べてみたが、打出焼についての概略を書いたものは数稿あったものの、系統的に書かれたものはなかった。それは開窯して100年足らずであることや、３代目が打出焼を継承していない所に原因があるらしい。

それまであまり古道具屋さんへ足を運ぶことはなかったが、その後比較的こまめに足を運ぶことになり、また、京都東寺（毎月21日）・北野天満宮（毎月25日）の縁日などでも注意をはらうようになった。近くでは、灘区の護国神社（毎月第４日曜日）・須磨寺（毎月第１日曜日）での縁日へも京都同様足を運ぶようになった。

しかし一方では、打出焼だけを収集しているとわかると、足元を見てふっかけてくるような古道具屋さんもあり、そうした古道具屋さんへはここ数年足を運んでいない。

古道具屋さんとの会話の中で、打出焼のコレクターが比較的多いことを知った。年令は40才からで男性がおもである。

収集を始めて８年目になり、目下のところ57種類をかぞえ、最近はできるだけ雑器を中心に収集に努めている。また、その中には打出焼を収集していることを知った方から、収集品に加えてくださいといただいたものや、うっかりして同じ物を２度買い、物々交換で収集したものもある。

展示について、1989年の年賀状で「…打出焼についてみなさんに見ていただこうと思っております」とごあいさつをし、今年の年賀状では「みなさんに打出焼のご披露を考えております」と書いたように、具体化には多少の時間を要した。

というのは、私自身がみなさんに見ていただく方法としては、たとえ１日であってもガラス越しに見ていただくのではなく、和室で実際に手にとって見ていただくことを希望していたからである。打出焼の湯呑みに打出焼の急須で入れた番茶をすすっていただけるような初披露を考えていたのである。が、そうした方法を考えている中で、借用の申し出が何件か相次ぎ、いつまでも私のわがままは言っておられない状況となった。

打出焼を秘蔵して他人に見せないコレクターは多い。こうしたコレクターたちは、私が当初希望した手にとって見せるなど考えられないといわんばかりで、まちがって割られでもしたらどうして

くれるんだという。まさしく骨董的立場からしか収集をしていないのである。

私の母が他界してすでにかれこれ30年あまりになるが、母は生前、瀬戸物（飯わんや湯呑など）は割れてあたりまえ、でないと瀬戸物屋さんはごはんを食べていけないとよく口にしていたことを今もよく覚えている。そんな母の口ぐせもあって、みなさんには裸で披露することに何ら抵抗感をもっていない。考古学に長年たずさわってきたことから、割れればひっつければ良いと思っている。たしかに後がない打出焼であり、多少危険な発想かも知れない。しかし後がない打出焼であるからこそ、私たちの息を吹き掛けてやらなければならない。

とはいえ、結局はえらそうなことを言いながら、諸般の事情で、初披露がガラス越しになったことを深くお詫びしたい。

最後になってしまったが、私の最初の打出焼との出会いは、30数年ばかり前にさかのぼる。芦屋市親王塚町におすまいだった、仕事上のお得意先の家のご兄妹が、近くの幼稚園へ通園していた頃か、卒園してからの頃かははっきり覚えていないが、その幼稚園の催物バザーに招待された際、運動場の一角で楽焼をしていたことを目にしたことである。もっとも、それが打出焼だったとは最近まで思いもしなかった。昭和30年代後半まで、市内の幼稚園は無論のこと、小・中・高の学校の行事の中で、打出焼を楽しんでいたようである。

前列右より２人めが二代目故阪口氏、後列筆者

以上が私と打出焼とのかかわりである。

打出焼の収集について、全く畑違いの場ながら、芦屋市明るい選挙推進大会のパネルディスカッション「住みよい地域づくり—いま・芦屋市は—」の中で収集の重要性を訴えたことがある。私は「家庭の食器すべてが打出焼であった時代があった。打出焼は今となれば、かつて芦屋の文化の一つであったといえる。個人が収集するのには限度があり、その点行政が積極的な姿勢で望めば収集にまだ遅くはなく、将来の郷土資料館の１コーナーを、打出焼でうめられることを希望する」と結んだ。

しかし、未だ打出焼を常設展示する施設はなく、市民がいつでも打出焼を展観できる状況ではない。

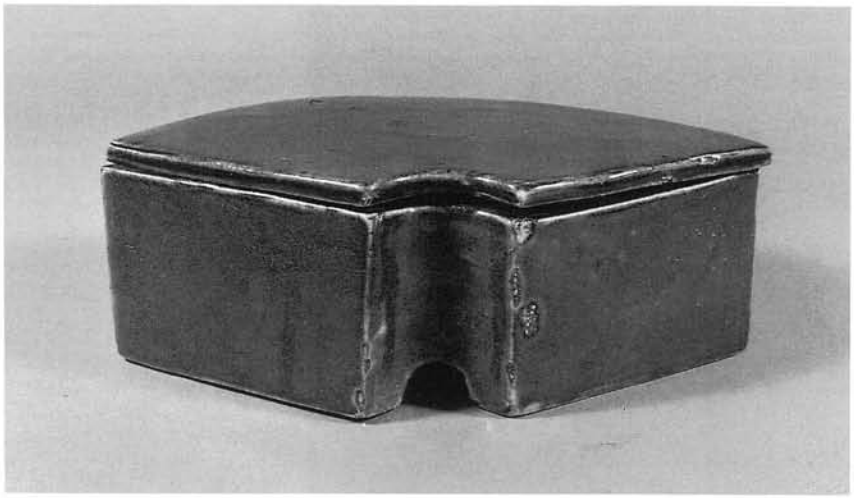
目下県が、今田町立杭に「陶芸館」構想を検討中であるという。今日の特別展に際し、多大のご協力をいただいた青木重雄氏が参与をつとめられている、財団法人兵庫県陶芸館が収蔵品を寄贈したのが、きっかけであるとも聞く。県は構想の中で、毎年県下産の陶磁器を収集・保存を進めていくとのこと。

私以上に打出焼を収集している人は数多いであろうが、なかなか市民の目にふれる機会は少ないであろう。それだけに、地域の資料はできるだけ地元で保存公開することが望ましいとは思うが、せめて県の構想の中で兵庫の焼物の一つとして、打出焼の収集・保存・公開が進められるよう、願ってやまない。

包装紙

1　二彩蘭文字入菓子器

2　染付松竹梅文蓋付碗



3　緑釉扇面形蓋付鉢

4　染付家鴨文小鉢

5　赤絵字入抹茶茶碗

6　黒釉菊文仙人像付盃

7　鉄彩家鴨文小鉢

8　窯変和歌入菓子鉢

9　色絵鳳凰文深鉢

10　鉄釉染分角鉢

11　三彩菊文八角鉢

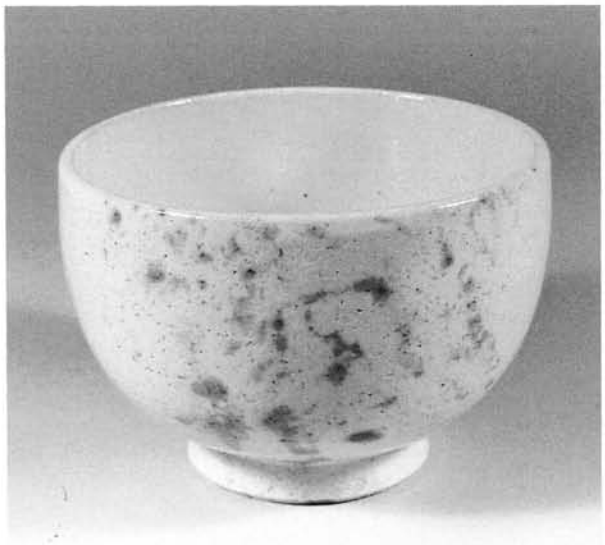
12　呉須松絵横筋入火入

13　鉄彩杉樹文深鉢

14　染付字入丸皿

15.27　鉄釉ツル草文丸皿

16　灰釉横筋入深鉢

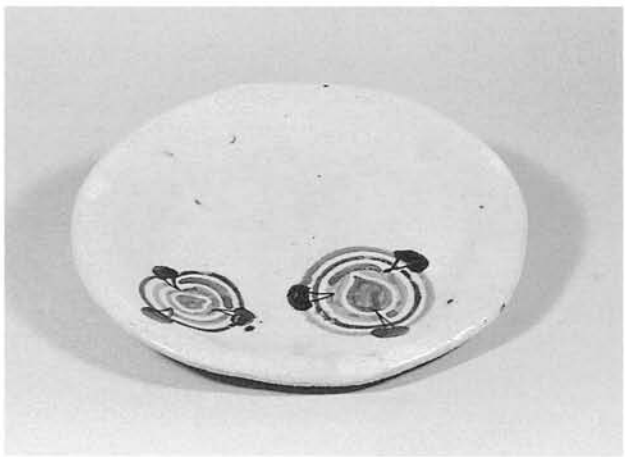


17　楽風窯変文湯呑

18　緑釉松文蓋付手焙

19　赤絵字入丸皿

20　色絵花文蓋付汁碗



21　二彩渦巻文皿

22　色絵花文蓋付しるこ碗

23　色絵茄子文菱形鉢

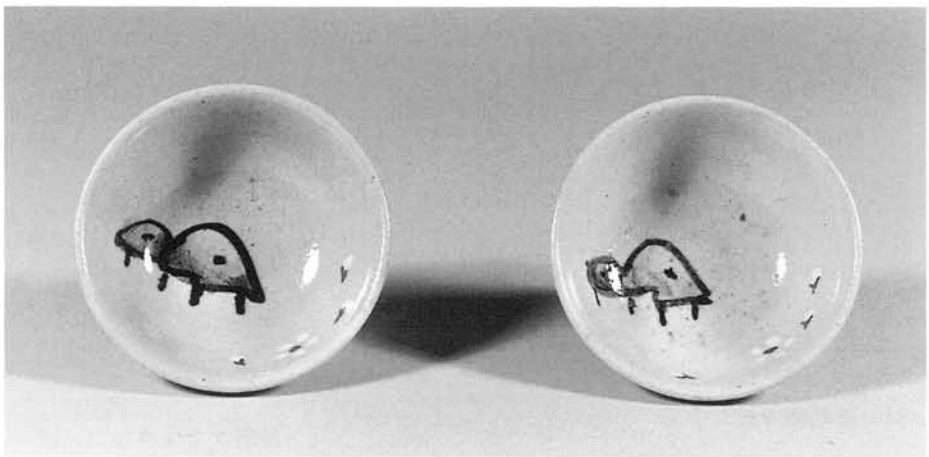
24　色絵花文六角小鉢

25　黄釉船形重ね透彫向付

26　白釉湯呑

28　鉄釉紅葉文丸皿

29　三彩家文盃

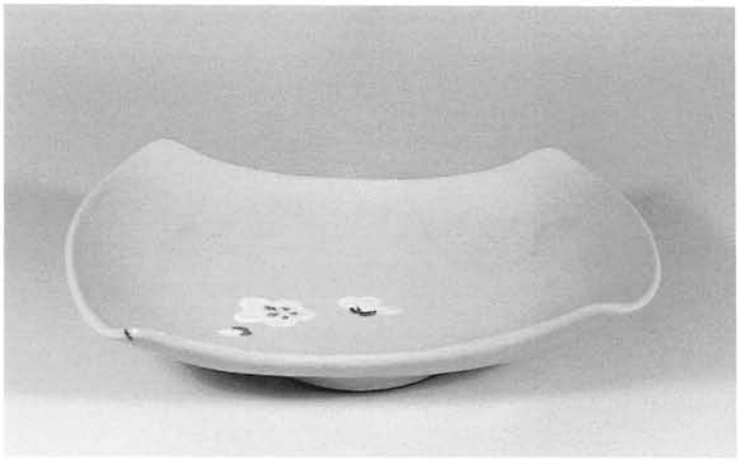


30　白灰釉小盃

31　透明釉海老文小盃

32　鉄彩兎文徳利

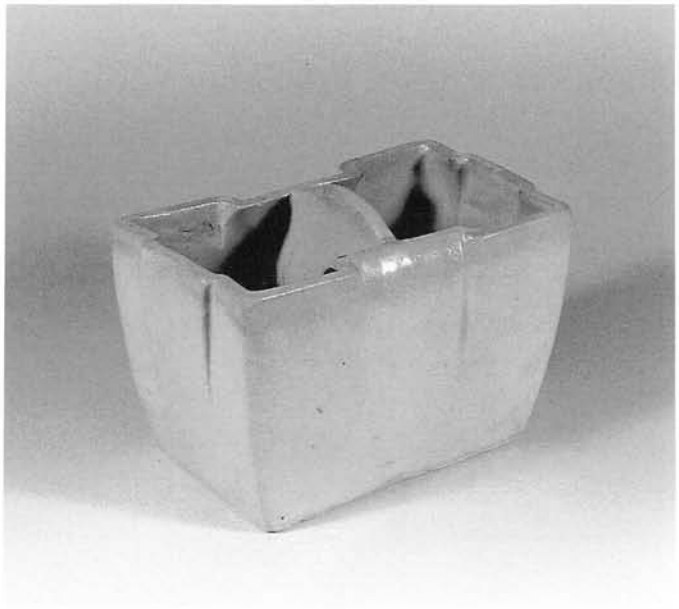
33　二彩すすき文徳利



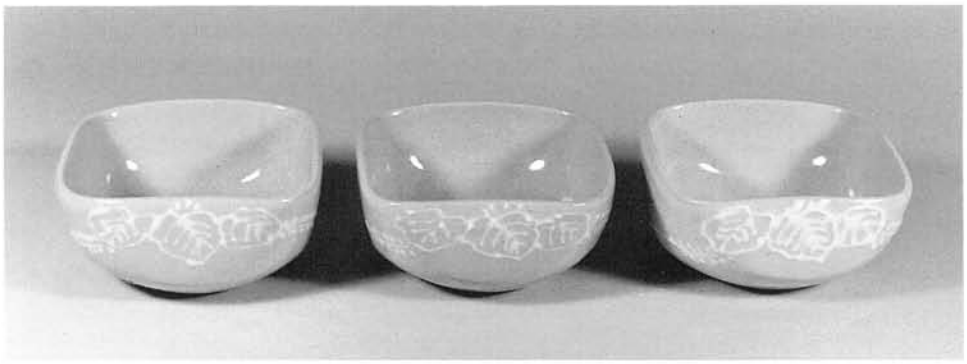
34　梅花文長角変わり皿

35　鉄彩雷文つなぎ小盃

36　二彩鳥文湯呑

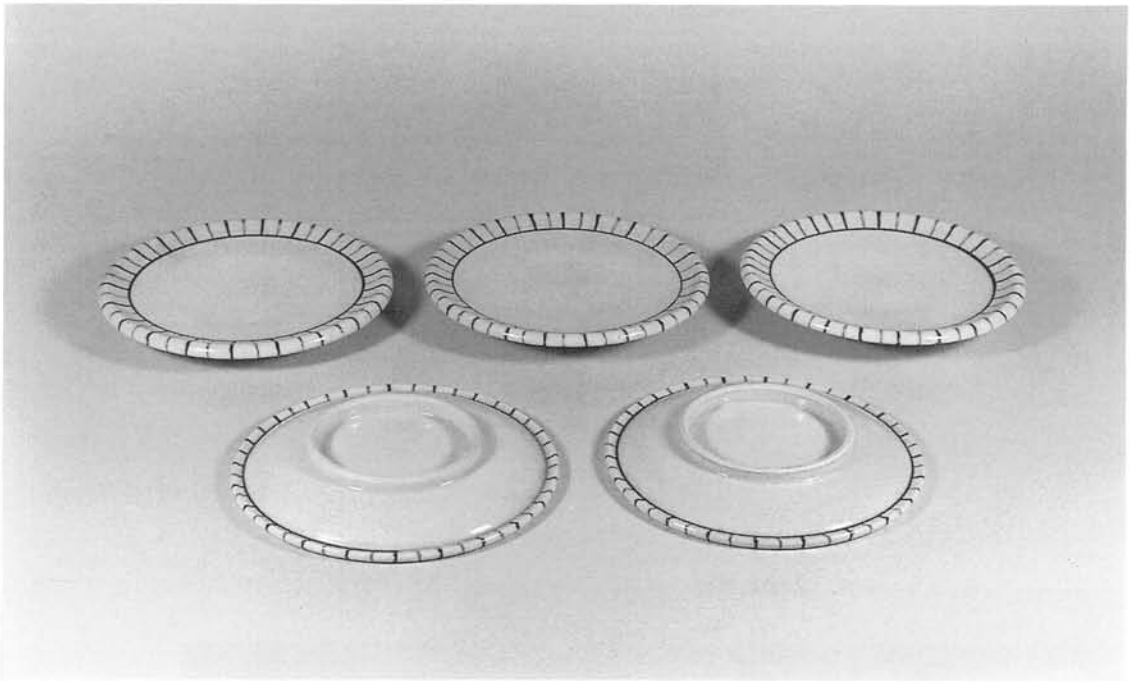


37　透明釉筆立



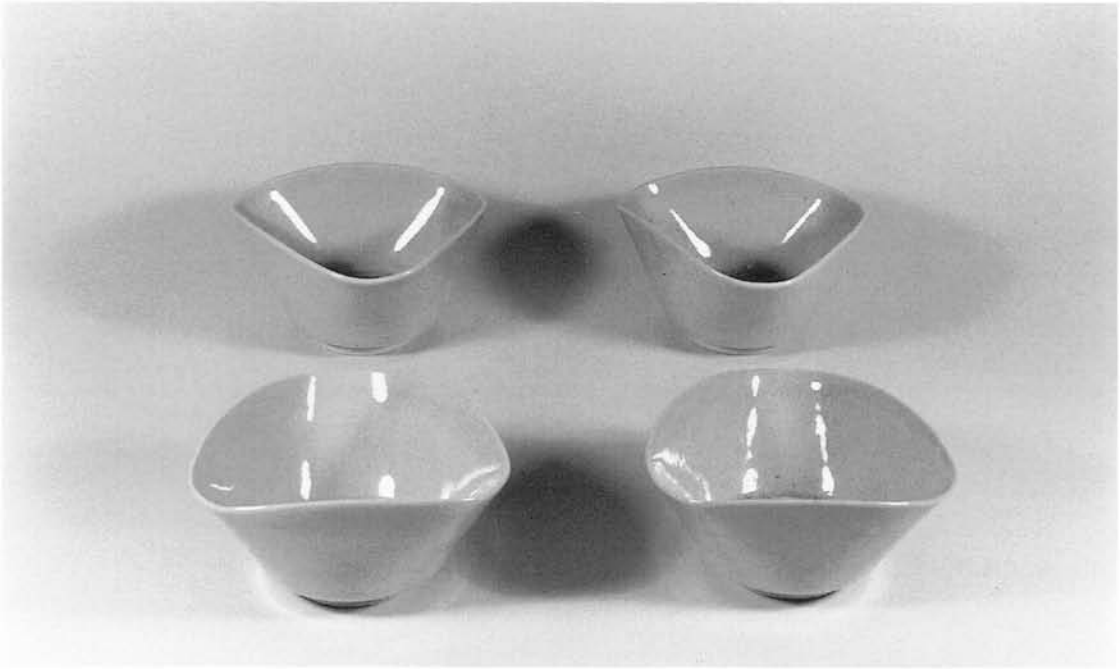
38.39　白釉ツル草文角鉢

40　二彩花文角鉢



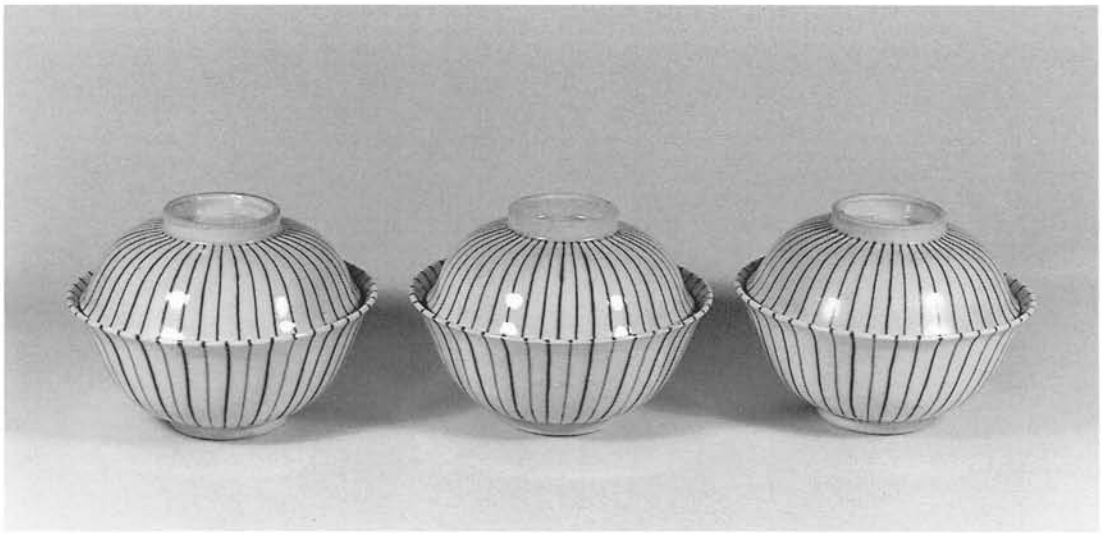
41　二彩丸皿

42　赤絵菊文丸皿



43　灰白釉花文三角形小鉢

44　色絵木草花文丸皿



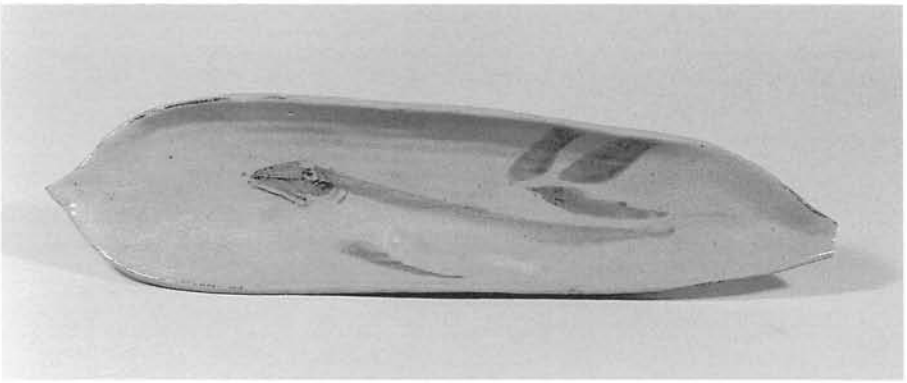
45　蓋付麦藁手文蓋付碗

46　白釉窯変丸形手焙

47　楽風白菊文変わり皿

48　色絵菊文徳利

49　二彩紅葉文小盃



50　二彩鮎文笹葉形皿

51　染付菊唐草文急須

52　白釉字入丸形壁掛

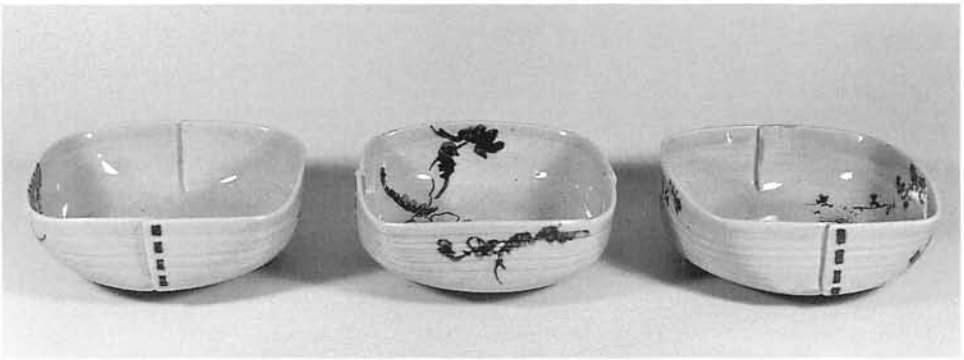
53　黒釉字入天目抹茶茶碗

54　緑釉透彫蓋付手焙

55　染付字入急須

56　俵手打出小槌鈕付壺

57　鉄釉和歌入四角皿



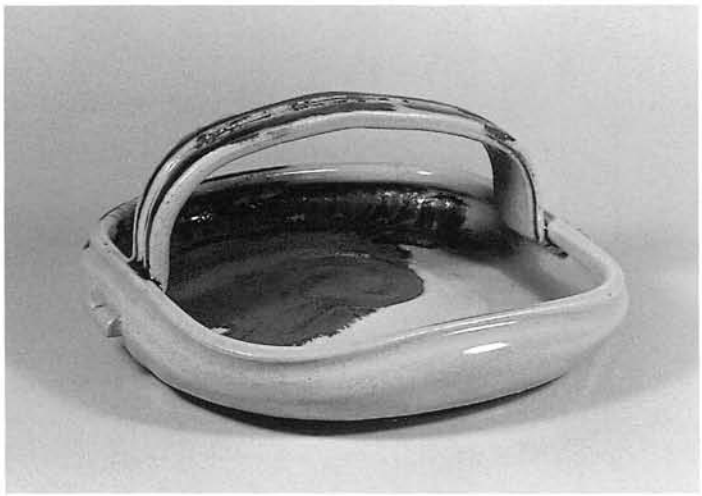
58　鉄彩梅文向付

59　鉄彩松葉文蓋付碗

60　緑釉風景文茶碗

61　白釉ツル草文角鉢

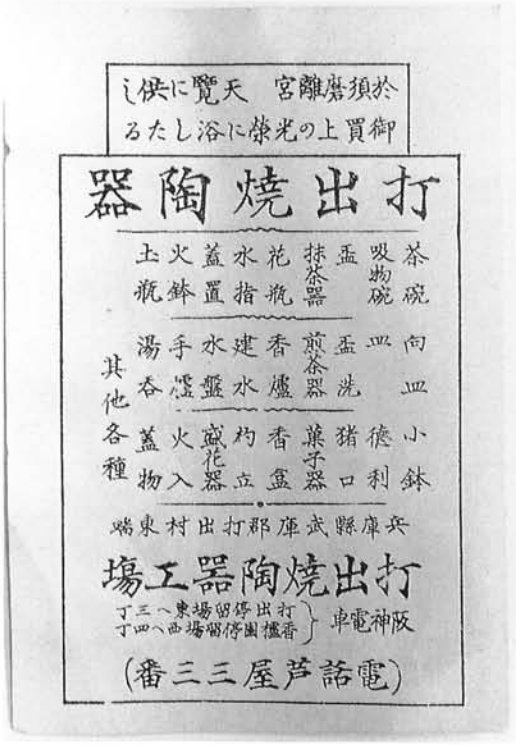
62　染付格子文輪花形皿



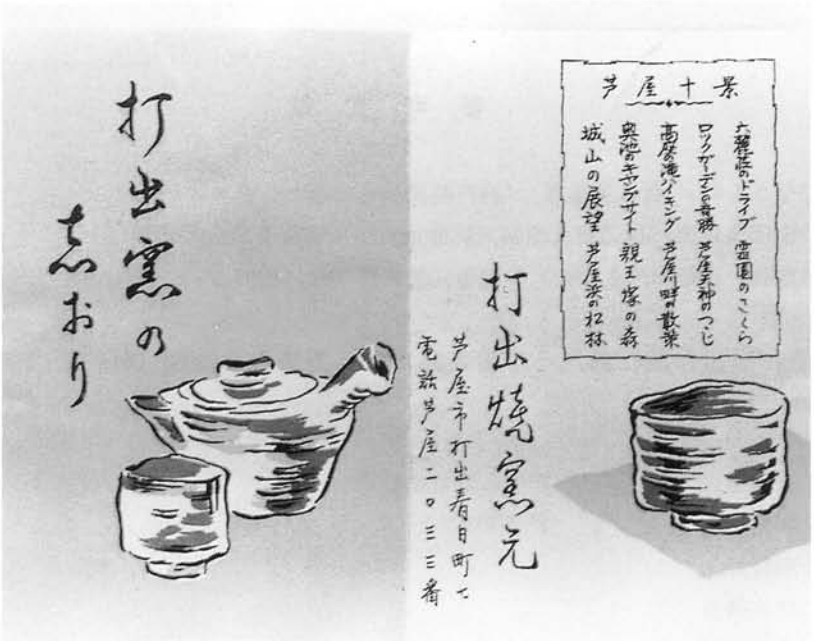
63　鉄彩手付菓子鉢

打出焼の刻銘（漢字とひらがなの２種類があった）

ちらし
（当時どんな物が作られていたかわかります）



芦屋市広報に掲載された広告



しおり（２つ折の表面）

しおり（２つ折の中面）

「打出焼」は　猿丸太夫や在原業平卿など、平安文化の遺跡を数々秘めた芦屋の里で作られる特産品であります。古代の大宮人が、つれづれに作った慰めの手づくりを伝承して、業平の父に当る阿保親王の墳墓にほど近く、今もなお窯の煙りを立てています。

この地に産する良質の陶土と特殊な釉薬は、洗練された技術によって雅趣豊かな色と型が調えられ、数多くの名品をはんでいます

天皇のお買上げや、博覧會に於ける優賞のほか、各流茶道の家元から称賛を賜わるなど、幾多の栄誉を担いつつ育てられて来ました、その枯淡な味と特異な風韻は、広く愛陶家の間に喧伝されております

打出焼窯元

阪口砂山

参 考 文 献

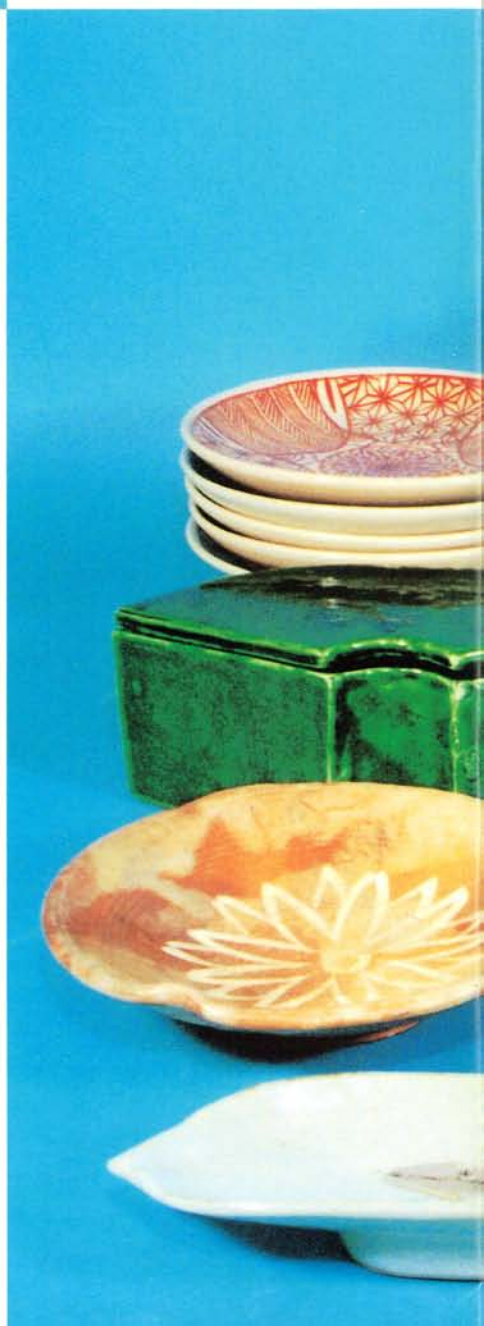
兵庫のやきもの／ 青木重雄著 ／神戸新聞総合出版センター／1993
芦屋の生活文化史／田辺眞人他編／兵庫県芦屋市教育委員会／1979
特別展図録　赤穂のやきもの／赤穂市立歴史博物館／1991

展示及び図録作成にあたってお世話になった方々・機関（順不同・敬称略）

青木重雄　　芦屋市教育委員会
明尾圭造　　芦ノ芽グループ
石野照代
岩本昌三
桑原啓爾
重川忠廣
千原公子
森沢達夫

特別展図録　**打　出　焼**
—藤川祐作コレクション—

発行年月日：１９９４．１０．２２
編集・発行：神戸深江生活文化史料館
〒658　神戸市東灘区深江本町3-5-7
印　刷：神戸カム株式会社



神戸深江生活文化史料館